

国費留学生 “小樽商大、第一号”

日本語はTVとマンガで学ぶ。
小樽は落ち着きのある街...好きです。



リー ジェミン 李 済民教授

商学科 / 経営学講座 国際経営論、経営学原理 (院)

1981年 2月 (韓国) 延世大学商経学部経営学科卒業
1985年 3月 小樽商科大学大学院商学研究科修士課程修了
1985年 7月 韓国開発研究院研究員
1988年 2月 (韓国) 延世大学院経営学科博士課程修了
1986年 3月 (韓国) 全州大学専任講師
1989年 3月 同 助教授
1989年 7月 小樽商科大学専任講師
1990年10月 同 助教授
1997年10月 同 教授

小樽での生活はどれくらいになりますか？
また、韓国と日本の生活年数はどちらが長いですか？

李：商大での院時代が2年、それに教官生活が16年ですから、合わせると20年近くになりますね。もうじき47歳ですから、日本と韓国の生活は中・高校時代の5年半を入れるとほぼ半々(同年数)ですね。それぞれ23年ぐらいです。

最初に小樽に来られた時の商大の印象は？

李：最初は留学の時で、留学生は誰もいなくて私1人でした。国費留学生としては“商大第一号”です。しかも、その翌年の1983年から2年間のマスター時代も私1人でした。当時は、現在の国際交流センターの場所に研究室があって、とても広い部屋でした。当時の印象は、いつもマンツーマンで、まるで家庭教師に習っているような感じで今とは全く違っていてユッタリとしていて、非常に恵まれた環境でした。指導教官は山下先生で「マーケティングシステム論」を中心に学び、また、たまたま居住先が同じとなった“緑が丘荘”で、ホイマン先生(オタゴ大学)から「戦略マネージメント」を講義していただき、両先生のお陰でこの両方をみっちり勉強することができました。

中学校・高校はインターナショナルスクール？ また、日本語はどのようにして学んだのですか？

李：父親の仕事(大使館勤務)の関係もあり、東京のインターナショナルスクールでした。日本語は正式には学んだことがありません。学校では英語のみの授業だったので、英語は個人レッスンを受けたりしながら学び、その傍ら“日本語(会話)はTVで、(日本)文字は漫画で”学びました。特に子供が読むマンガには必ずル

ビがふってあるので覚えやすかったのです。おおよそ2年ぐらいで日本語で喋れるようになりました。

商大の教官として赴任された時は、どんな状況でしたか？

李：確か1986年か87年頃だったと思いますが、商大で制定された「外国人教官任用特例法」の適用の第一号の筈です。赴任時に藤井榮一学長から“三つの条件付”である旨を告げられました。それは、「3年間の任期つき(但し、更新可能)」、「役職(いわゆる管理職)には就けない」、「海外留学はできない」でした。これ以外は全て他の教官と同様条件である旨も付言されました。

海外留学が不可とは？

李：その当時は、文部省の国費在外研究を意味していました。でも後になって、緑丘ファンド(緑丘会)の若手研究員として、シアトルのワシントン大学に1年間留学することができました。

その際の研究は、やはり「マーケティング」それとも「戦略マネージメント」？

李：商大に赴任した後、(当時は小講座制で)私と高田教官とで、「比較経営学・比較経営史・国際経営」の3教科を担当してました。その後、大講座制に変わり、自分は「国際経営学」を担当することになった関係上、ワシントン大学ではアジア研究が盛んなサイバー研究所(CIBER)で地域・文化・語学を中心とした国際経営の勉強に専念できました。

シアトルはどんな街でしたか？

李：印象的には綺麗で住みやすい街でしたね。シアトルは産業的には(当時は)ボーイング本社やマイクロソフト社等があり、貿易港として

も有名ですね。また、“湖と海と緑”に囲まれた調和のとれた街です。浮き橋が幾つもあり、これらがシアトルと郊外の都市を結んでいる本場に綺麗で清潔な街です。緯度的には北海道よりも高いのですが、冬はそれほど寒くないんです。むしろ冬は雨季でシトシトと雨が降り、“雨とコーヒーが似合う街”です。コーヒー店が多いのも特徴です。

1年間でなく、まだまだシアトルに居たかったのでは？

李：そうですね。もう少し... (笑) ただ、当時アメリカは財政難の時代でしたから、何事においても予算カットの時代でもありました。大学内ではコピーの枚数まで制限されていました。こうした一方で、アメリカのフットボール・チャンピオンチームだったのが「ハスキーズ」(ワシントン大学フットボールチームの愛称。あのポブサップも在籍していた...) だったんです。でも、麻薬問題があったり、当時の財政難の影響をモロに受け、予算も大幅にカットされたりして、チームを維持することも困難だったようです。研究面では、若手研究者と共同研究を進める予定だったのですが、やはり財政的な面を理由に、彼等は他の大学に移ってしまい、いまいち残念でした。

奥様の故郷でもある「北海道・小樽」の印象は？

李：大学院への進学時には、小樽という地がいったいどこなのかも知りませんでした。初めて来樽した当時は、折りしも“運河論争”の最中で、どちらかという“斜陽の街”という印象が強かったです。ですから、院生時代の初めての半年間は正直言って小樽があまり好きにはなれず、韓国に1カ月の間(夏休み期間)は一時帰国しました。その後、再び小樽に戻ってから徐々に小樽の良さが解かってきました。その理由は、居心地のいい雰囲気からくる“落ち着ける場所”という認識が出てきたからだと思うのです。暮らしのスタンダードは高く、文化面でも誇れる街...といった印象がありました。

先生のご趣味は？

李：身体を動かすことは好きです。中でもテニスが好きですね。(商大の教官テニスの四天王のお一人とか) ゴルフも少々やりますが初心者レベルです。その他には(昔から)絵を描くことが好きで、一時は真剣に画家になろうと考えたこともありました。

ワールド・カップ(サッカー)で、もしも日本と韓国とが対戦することになったら、どちらを応援しますか？

李：勿論、韓国です。(笑)ただ、やはり韓国の選手に関しては殆んど知らない...でも、韓国が勝った方が嬉しいです。(笑)